

《正岡子規(36)の続き》その267  
子規周辺の人びと(十七)

平岸 三八

大学の卒業を前にしての試験の落第には、かねて退学を決意していて、恩人の陸羯南の反対にも、親友の夏目漱石の忠告にも従わず、学業を廃してしまった。しかし大学予備門での落第には、小学校以来初めての落第といい、親類などにいたく叱責せられかなり落ち込んだ様子である。数学(幾何)で落第したのであるが、幾何が解けないのではなく、説明や証明の英語が理解できなかったのである。

数学一科目だけの落第点で留年したのではなく、他にも何科目か落第点があったのではなからうか。

明治25年の学年試験の落第は、リース先生の歴史で落第しただろうとの推測である。

リース先生とは『岩波西洋人名辞典』によると、Ludwig Riess(1861~1928)は、ドイツの史学者で、明治20年(一八八七)招かれて東大で史学を講じ、はじめて科学的歴史研究法を教え、また専門的西洋史学研究の基礎を開き、ランケ派史学の移植に努めたとある。

帰国(一九〇二)後、ベルリン大学講師、ついで助教授となった。夫人は日本

人で大塚氏。

独文及び英文の著書があり、なかには日本に関するものもある。英国史に関する著作もあるから、英語にも達していたのであろう。東大では英語で講義をしていたものである。なかなかの学者であったらしいが、子規は講義にも碌に出席せず、出席してもドイツ人の英語に苦しんだのである。

試験については、愉快なエピソードを残している。予備門の入試の際、仲間が相談して教え合うことにし、近隣の席に坐をかまえることにした。今は勝手に席を占めることはできないだろうが、当時はそんなルーズさであった。

当時、子規は共立学校(のちの開成中学)の第二級で、まだ受験の力はないし、殊に英語の力が足りないことは分っていたが、場馴れのつもりで受けたのである。ところが科によっては、存外たやすいものもあったが、やはり英語は一番に困った。

問題が配られて見ると、知らない字が多い。かねて気脈を通じている仲間から、問題の中のむずかしい字の訳を伝えてくるので、少しづつ目鼻が明いて、こじつけた訳をつけておいた。

ある字が分らず困っていると、隣から「幫間」と教えてくれた。それでは意味を成さぬと思ったが、他に訳しようもないので、そのまま幫間と訳しておいた。あとで聞くと、それは「法官」ということで、ホーカン違いだったのである。口伝えだからの誤だったが、それでもどうやら合格したのであるから、他の科目が

よかったにちがいない。明治22年の5月に始めて咯血した。其後は脳が悪くなつて、もともと試験嫌いが、いよいよいやになった。

前号に記述したように、子規は大学に入学したときは、文科大学の哲学科に入学し、明治24年に哲学科から国文学科に転じたのである。

哲学の先生はブッセ先生で、その哲学総論を24年の春に受けることとなった。その時のことも、「墨汁一滴」に記されている。

試験は受けない訳にはいかないが、哲学が少しも分らない。一例を云うと、サブスタンスのレアリティーは、有るか無いかというようなことが、いきなり書いてある。レアリティーが何の事か分らぬのに、有るか無いか分るはずがない。哲学というものが、こんなに分らぬものなら、哲学なんかやりたくないと思った。それだから、哲学の講義を聞きにも行かない。

ブッセ先生というのは、これも岩波の『西洋人名辞典』によるとLudwig Busse(1862~1907)は、ドイツの哲学者で、ライプチヒ、ベルリンの両大学に学び、帝國大学文科大学哲学教師として来日、哲学概論、倫理学、論理学を(明治20~25)講じた。帰国後ケーニヒスベルク、ミュンスター、ハレの大学教授に任じ、数種の専門著書があるとある。なかなかの学者であるらしい。明治政府は、よく優秀な外人学者を招いたものだ。